

# 佐同教だより

佐賀県人権・同和教育研究協議会

住所 佐賀市大和町大字川上佐賀県教育センター 研究調査棟内  
TEL 0952(62)6434 FAX 0952(62)6435

## 第38回九州地区人権・同和教育夏期講座 有田・嬉野に九州各地から三千人が集う



大会初日の8月23日(火)、大変な雨の中、有田町焱の博記念堂に3千人近くの仲間が九州各地から集い、交流を深めました。

記念講演では、「子どもたちのためにわたしたち一人ひとりができること」子どもをファミリーで捉えたときにひろがるネットワーク、チームワークの可能性」と題して、大谷るみ子さん(東翔会グループホームふあみりえホーム長)、川満佳代子さん(大牟田市立白光中学校長)、佐藤ますみさん(直方市立直方西小学校 児童支援主任)、坂口明夫さん(子ども家庭支援センターあまぎやま 主任相談員)の4人の方に登場していただきました。

初めに、ある家族の様子が映像で映し出されました。そして、パネラーから、家族一人ひとりが抱える問題を指摘され、それぞれの問題解決をサポートする制度や地域

の社会資源(ひと、もの、こと)などの提案がありました。

その後、4人の方によるパネルディスカッションがありました。

子どもたちの育ちや学びに関わるさまざまな立場の人たちがネットワークでつながり、役割分担と協働の取り組みを創り出し「子どもをファミリーでとらえる」視点の大切さを学ぶことができた内容でした。

2日目は、嬉野市体育館で特別講座Ⅰ、Ⅱがあり、その他に嬉野市内の6会場で分科会がありました。

特別講座Ⅰでは、「佐賀からの発信―発見しよう!自分のできることで、自分だからできること」と題して、小城市立芦刈中の3年の生徒たち、NPO「小麦の家」、佐賀嬉野バリアフリーツアーズセンター、佐賀市教育委員会子ども課の4者からのリレートークで、「人権学習」「就労支援」「人に優しいまちづくり」「児童虐待への取り組み」などについて、自分たちの思いや願いを実現するために行動していることが発信されました。会場の参加者には、「質問」や「感想」

を付箋紙に書いて参加してもらい、お互いに交流を深め合うことができました。また、それぞれが、「自分にできることは何かを？」問うことができました。

特別講座Ⅱでは、「いま、子どもたちにとって必要な育むことが必要か？—フランスの教育をかみにながら—」という題で、中央大学教授の池田賢市さんに講演していただきました。

子どもの学びや育ちを阻害している社会的要因はさまざま、しかも、社会の在り方が複雑化し、子どもたちの課題は、重層化しています。

フランスの小・中・高校では、「7週間勉強して2週間休む」というリズム（「7—2リズム」と呼ばれている）で学年が構成されているそうです。また、学週5日制ではあるが、休みは、土・日でなく、水・日なのです。これらは、子どもの「生活」に着目し、そのリズムを大切にしているからなのです。このようなフランスの教育の現状から、「テスト」中心の日本の学力観への問題点などの指摘がありました。

実践講座の分科会は第1分科会「乳幼児期にかかわって」、第2分科会「学校の教育力の充実Ⅰ」、第3分科会「学校の教育力の充実Ⅱ」、第4分科会「子ども支援・親支援Ⅰ」、第5分科会「子ども支援・親支援Ⅱ」、第6分科会「人権のまちづくり」の6講座

でした。

佐賀からは、第6分科会で、伊万里特別支援学校教諭 谷川 忠光さんが、学校卒業後も、さまざまな関係機関と連携し、就業支援を実現していった取り組みを報告されました。また、第4分科会「子ども支援・親支援Ⅰ」で、NPO法人唐津市子育て支援情報センター センター長の山口ひろみさんに、実践を報告していただきました。以下、山口さんの報告を紹介します。

### 山口さんの報告要旨

「支援を届けながら、地域のつながりをつくりたい」



大阪で、初めての子育てをしていた頃、不安に押しつぶされそうな、孤独な子育ての日々を救ってくれたのが、掲示板に貼られていた「ぴよぴよらんど」のチラシでした。勇気を振り絞ってくぐった扉の向こうに待っていた体験が、今の山口さんの活動の原点になっています。孤立して子育てをしているお母さんをサポートする

には、何が必要なのか：お母さんたちの声を救いあげ広げていった活動の中には、緊急時にサポートしてもらえる「ラビットくん」、そして病氣回復期の子どもたちを預かる「しろくまくん」がありました。

また、お母さんたちを孤立させないために、「つながる」をキーワードに、官民を巻き込んだの食育講座が開催されています。年間を通して行うことで、人や社会との温かな関わりを感じてもらい、地域、社会、そして仲間とつながりながら子育てをしてもらいたいという願いが感じられました。



支援活動の原点となっている「親を元気にしたい」という思いから始まり、進化しながら続く山口さんの活動に対し、分科会参加者からは、行政の画一的な取り扱いを改善することや、つながりを作り上げることの難しさを挙げながらも、「子どもの笑顔のために、それぞれの地域での活動を支援したい」という意見などが出されました。

社会教育部活動報告

県外現地研修会に参加して

武雄市社会教育指導員 一ノ瀬 憲昭

今年度の県外現地研修会が10月13日(木)・14日(金)の2日間、県内の社会教育関係者15名が参加して、岡山県倉敷市で行われました。

岡山県は幕末の安政4年に渋染一揆が起こったところです。渋染一揆は、備前岡山藩の被差別部落の住民53団が「被差別部落の住民の着衣を柿渋の渋染によるものとする」という御触書の撤廃を求めて立ち上がり、その撤廃に非武装で成功したもので



す。このように、明治維新以前から人権意識の高かったこの地域での研修は、学

が多いだろうと期待して参加しました。1日目はフィールドワークと講話で、岡山部落解放研究所理事長の楠木裕樹さんの案内で池畝周辺の古代遺跡の見学に行きました。岡山県は吉備王国との関連で古墳が多いそうです。

その後、富八幡神社に行きました。この神社は丘陵地の頂上にあり、ここからは瀬戸内海に面した玉島付近一帯が眺望され、およそ1200年前に創建されたこの古社の重要さが窺がえるようでした。

遺跡の見学後、楠木さんから池畝の部落史について話を聞きました。渋染一揆にもこの地区から参加していたことや、古代吉備王国は鉄の製造や須恵焼きなど高度な技術集団がいて、それが渡来人と関係している、被差別部落の発生とも関連しているようであるといった興味深い話でした。そして、これからは、ふるさとの歴史に誇りを持ち、ふるさとの自慢ができる自尊感情の醸成を図っていききたいと結ばれました。

2日目は倉敷市の社会教育における人権学習推進事業について研修しました。先ず、人権推進室長の大月隆志さんから倉敷市の概要、基幹公民館4館(倉敷・水島・児島・玉島)と地区公民館26館(各中学校区に1館)があり、「よいこいっばいのまち倉敷を」をめざしていること。また、推進室の組織目標は「人権を尊重する社会の実現」であ



ることなどの話がありました。次に、人権学習事業の概要について、説明を受けました。中学校区の各公民館が発行している「人権だより」を見ると

支援学校との交流、人権標語や作文、人権教育講演会、高齢者福祉施設での交流会など、さまざまな活動が行われていることがわかりました。全ての人が大切にされ、人権を尊重し合う明るく住みよい地域づくりを進めていることや、倉敷市の学力は全国平均以下であるが、自己肯定感は上位であるということでした。

今回の研修で倉敷市は人権意識が高いということを感じました。それは、渋染一揆以来、人権意識や人間としての誇り、連帯感などが100年以上にわたって連綿と受け継がれていることによるものだと思います。歴史の重さを感じました。

今回この研修で学んだことを、今後の活動に生かしていきたいと思えます。

## 「社会教育指導員となつて」

小城市社会教育指導員 常松 厚生

本年4月より小城市社会教育指導員として同和教育推進事業に携わるようになりました。毎日多くのことを学ばせてもらっています。学ぶだけでは職務を果たすことが出来ないのです、同じ職場の皆さんや近隣市町の指導員みなさんに教えを請い、懇談の際の留意点など具体的な対応について、身につけるよう心がけています。しかし、実際に懇談会に向く度に運営の難しさを感じています。

小城市には181か所の行政地区があり、3年間で全ての地区を回る人権・同和教育地区懇談会を実施しています。今年は60か所を訪問実施中です。夕刻7時半より9時までの懇談は、当然のことながら毎回各か所違った雰囲気、多くの指摘を受けたり、示唆を与えられたりして、主催者側が考えさせられる場合が少なくなく、人権・同和教育推進の難しさを実感しています。

また、「なぜ今頃同和教育か」とか「市役所としてもっと重要な課題はないのか」という率直な意見に対して、理解をいただくにはどのように丁寧な話し方をすればいいのか苦慮することも多い毎日です。人権にかかる課題は領域が広く、どれも

大切な課題ばかりで、どの人権問題をどんな場面で話題提供すべきか難しさを感じています。8月の懇談会は、必然的に戦争の話題が多くなり、人権問題の最たるものとしての戦争がもたらす悲惨さ、平和の有難さを懇談会を通して改めて感じさせられました。

現在も世界各地で内戦等によって多くの人命が失なわれたり、傷つけられています。一般市民、幼い子どもたちもその犠牲となります、日本から見れば異国の出来事と感じられますが、同じ地球人として課題を共有しなければならぬと感じます。

人権に関わる多くの資料が職場に送付されてきます。その中に、過去、人権問題に関わった先人たちがいます。例えば先の大戦中に多くのユダヤ人の命を救った杉原千畝さん、熊本回春病院で献身的な仕事をされたハンナ・リデル女史、エダ・ライト女史など人びとはあまり知られていない人たちの功績を伝えていくことも大切な役割ではないかと感じています。

この職務につくまでは、人権は当たり前すぎて、その有難さに気づくことはあまりありませんでした。しかし、人権問題の一つひとつを見つめていく時、改めて現在の私たちはいかに人権が法的に保障されているか(もちろん今後拡げていかねばならない領域も少なくありません)を感じます。

## 佐賀県人権・同和教育研究協議会

## ○来年度の予定

総会並びに研修会 5月25日(金) メートプラザ

夏期講座 8月10日(金) 会場未定

第42回研究大会 10月26日(金) 佐城地区

たくさんの方のみなさんの参加をお待ちしております

これらの人権獲得には長い歴史と先人たちの努力があった事実も伝えていかねばならないと感じます。課題の多い指導員の仕事ですが、真摯に丁寧に対応していきたいと感じています。